
もう一人の孫策～天虎の生き様～

銀色の空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の孫策～天虎の生き様～

【Zコード】

Z8829Z

【作者名】

銀色の空

【あらすじ】

孫家にはもう一人の策の名をもつ者がいた。

その者が駆ける道はどこか？

「俺は天を駆け抜け天虎。その背に乗つてみる気はないかい？」

最強で無敵、天下無敵のその男

「姓は孫 字は白蘭だ。名だと? そんなもんとつぐの昔に捨てた！」

！」

○○自己紹介（前書き）

初投稿です。
よろしくお願いします。

〇〇自己紹介

自己紹介

姓 孫名 策字 白蘭

真名 白夜

性別 男

年齢 19歳

顔 上の上 髪 銀色 体 背中に大きな？印の傷があるバツ

性格 基本的に優しく怒ると怖いらしい（はわわ軍師 + あわわ軍師
談）

敵には何も容赦しない。だが、女だと？

孫家の血が母から受け継いでおり、戦場で一定以上の血を浴
びると

虎のようになる。

好きな物（人） 煙管 酒 自分を愛してくれる女

嫌いな物（人） 孫堅 命を軽く見ていくいつ 政務

武 呂布を超えるほど 知 各軍師にも負けないほど

武器 日本刀様な刀を2本を腰の両側にある。
サブ武器 小刀を腰のポーチに10本ちかく入っている

説明

孫策（雪蓮）のいとこで孫堅の姉が生んだのが白夜。

だが、父は戦死、母は白夜を生んでもすぐに死んでしまい孫堅に預けられた。

母が死ぬ間際に（（孫策））といふ名をくれた。

だが、白夜には武の才能も知の才能もなく。「策」という名を名乗れなくなつた。

そのかわり、雪蓮には、武の才能があり王の霸氣というものがあった

そして義姉の雪蓮が（孫策）と言われた。

その数年後、白夜が国に追放された。

〇〇自己紹介（後書き）

これから、頑張るぞ〜

01天虎～母との別れ～（前書き）

1話目です。

よろしく～な～（^ ^）

01天虎～母との別れ～

僕が生まれる前に父は戦死した。
結構名前が知られていたらしい。

そして、母は僕を身ごもった。

とても、嬉しかつたらしい。「あの方の忘れ形見です」と涙を流しながら笑っていたらしい。

そして母は、僕を生んだ。
また、泣いていたらしい。

そして母は、病を患つた。

そうとう酷いらしく「もういつ死んでもおかしくない」と医者が言つてきた。

母は、それを聞いてすぐ僕を呼んだ。
まだ赤ん坊だった僕は、侍女に連れられて母の自室に行つた。

「ああ、私のいとしい子」
自室について母は寝ながら、迎えてくれた。

「ちょっと、この子と2人にしてください。」

母は、侍女をさがらせた。

「ふふ、元気ね」

母は笑っていた。

「・・・」

すると、ずっと笑っていた母は、急に何を思ったのか笑みをやめた。

「・・私は、もうすぐ死にます。」

ぽつりとつぶやいた言葉だった。

「私はもうすぐ死にます。あなたには、幸せになつてほしい」一度息を整えてまた言い始めた。

「あなたは、幸せになつていいい人なのよ。それなのに、私は、あなたに愛というものを教えられなかつた。なにもあげれなかつた。」

涙を流しながら言い続けた。

「ふふ、赤ん坊相手に何言つているんじょうね。」

クスッと笑い、涙を拭いた

「あつ、そうそうあなたの名前だけね。

あの人気が決めたのよ。あのひとつたらね・・・・・

それから、父との出会いだとここがカツコイイだとか
とても強いだとここが好きだとか

いや、しらとけど（汗）

30分ぐらい？

「・・・つまりこうなったわけよ」

あの、この中ではまだ赤ん坊なんですけど（汗）

「まあ、あなたに言つてもしかたないんだけどね」
はい。そうですね

「それでね、あなたのお父さんはね戦場では『白虎』って言われて
いてね
その髪はあの人遺伝ね」

そのときの、母の笑顔はとてもきれいだった。

「それで、あなたの名前は、姓 孫名策字白蘭
どう?いい名前でしょ?」

また、にこりと笑い口を開いた。

「そして、真名は

白夜

それが、母から聞いた最後の言葉だった。

01 天虎～母との別れ～（後書き）

やばい、文才がない

02天虎～雪蓮と冥琳と祭に知り合つて（前書き）

頑張るぞ～

02 天虎～雪蓮と冥琳と祭に知り合つて

父、母が死んだ。

それから、僕は叔母だという孫堅さんに引き取られた。

白夜5歳

僕は、今『吳』といつ国にいます。

孫堅さんは「今日から私があなたの母親だ」と言ってくれた。子供ながらに嬉しかった。

話が変わるが義母（孫堅）には娘がいた
名前は、まだもらつてないらしい。

（10歳になるともらえるらしい）
真名は『雪蓮』といつらしき。

僕より数ヶ月先に生まれたらしい。
まあ、義姉です。

説明すると・・・とてもウザい

たとえば、朝早く僕の部屋に来て「釣りに行くわよーー！」
と言い、たたき起され釣りに連れていかれた。

いや、あなた姫なんですけど（：—一）
いいんですかね（汗）

しまいには、「飽きた」と言い僕と冥琳さんにまかせ森に行つてしまつた。

冥琳さんは「仕方ないな」といつ顔をしていた。

いつもお疲れ様です。

そして帰つてくると木の実などを持つてやつてくる
「あ～火をつけるのは私の役目なんだから～」と頬をパンパンにして行つてくる。

はいはい、もう慣れましたよ。
悲しいことに（泣）

また、今度は「冥琳に怒られた～（泣）」

いや、知らんし（汗）
勝手にしてくれ

また、前の話にいた冥琳さんの説明もしておこう。
冥琳さんの名前は、姓 周 名 瑜 字 公謹
真名は『冥琳』という。
姉さん（雪蓮）の幼馴染らしい
冥琳さんは、とても頭がいい。
姉さんのことを見止められるうちの1人だ。
将来の有能軍師候補だ。

もう一人姉さんを止める人がいる。

姓 黄 名 蓋 字 公覆
真名は『祭』という人だ。

義母に仕えており奥の宿将でとても『がつまご』
髪は薄紫でショートヘヤーだ。

歳は「ヒュ」 矢を放った音
サク ピュー

作者の眉間に矢が直撃

返事がないただの屍のようだ。

いやいや、冗談ですよ。ははは 棒読み

なんか、変な電波が？

まあ、まとめてみると、とても美女ですね。

美(少)女

間違えないように

まあ、暇はしません！（^ ^）！

ある日、義母に鍛錬を付き合つてもらつた。

もちろん、義母には一太刀も当てれなかつた。

その日から、義母の僕に対する態度が変わつた。

02 天虎～雪蓮と冥琳と祭に知り合つて（後書き）

あれ？

なんか、自己紹介みたいになつた？

どうしよう

03天虎～名を無くす～（前書き）

ちょっと編集します

〇三天虎～名を無くす～

「」の前、義母と鍛錬してから義母の態度が変わった。

「休む暇があるなら鍛錬をしろ。寝る暇があるなら勉強しろ」「それから、白夜は文字どり血を吐くまで鍛錬を繰り返されたそれは、各武官、文官から見ても酷いものだった。

「堅殿！あれば、いたさかやりすぎですぞ！？」

祭が孫堅に向かつて強めに言葉を放つ

「そうよー母様あればやりすぎよー！」

「孫堅様、私も祭様と雪蓮と同意見です」

祭に続いて雪蓮は、怒りをあらわにして周瑜は雪蓮のように怒りを表に出していないにしり、口調はわずかに怒っていた。

それまで、だまつて聞いていた。孫堅は口を開いた。

「あの子には、なにもない」

ポソリとこぼした声を3人は聞き逃さなかつた。

「なにがないっていうのよー!?」

雪蓮は怒りを隠さずに怒鳴つた

だが、祭、冥琳はなにか思い当たることがあるのか口を開かなかつた

するとまた孫堅が口を開いた

「あの子には、武の才能も知の才能も微塵も感じられない」
その一言で十分だった。

祭は、その一言を聞きを手血が出るくらい握りしめ

冥琳は、歯を食いしばっていた。

「で、でもこれから強くなるかも知れないじゃない…？」

雪蓮の言つたことはただの同情だつた。

白夜の武の腕前は、壊滅的だつた

それは、子供が見てもわかるほどに武の才能が微塵も感じられなかつた。

ならば、「知はどうだ?」と勉学をさせて見ると
またも、知の才能というものがまつたくなかつた。

「そうだ、雪蓮。あの子はまだまだ強くなる可能性がある」
雪蓮の言葉を肯定して返した。

「だつたら「だがな……」つー。」

雪蓮の言葉を孫堅がわえざる。

「まだ、子供だから。じゃあ、ないんだよー。」

雪蓮達に怒鳴つた

「ただ、弱いだけならまだいい。あの子には『才能』がないんだ！」

？」

雪蓮は唖然とした。

いつもは、優しくずつヒーリングしている母だが、やるべきことばかり

やり

戦場では『江東の虎』と恐れられている母がそろひこった。

「黄蓋！あいつに武の才能はあったか！？」

祭はなにも言えなかつた。

それもそのはずだ。

白夜の鍛錬を一番付き合つていたのは祭だったのだ

白夜の武の才能がないのは誰よりも知つていたからだ。

「周瑜！あいつに知の才能はあつたか！？」

冥琳も祭と同じく白夜の勉強を教えており
白夜の知の才能がないのを知つていた。

「雪蓮！あいつに霸氣を感じられたか！？」

雪蓮は、祭や冥琳のよくなにも教えてはいなかつたが
7歳にして武の才能と霸氣が見え隠れしており
氣というのを感じとれるほど成長していた。
その雪蓮が見るに何も感じられなかつた。

「みなも、わつていいのだのう、あの子のことを」

「……」

雪蓮達は、また何も言えなかつた。

「この話は、ここまでだ。」

と、孫堅は玉座から立ち上がり、血室へ戻つて行つた。

雪蓮、冥琳、祭はその後ろ姿をただ見送るだけだった。

[冥琳 side]

「きい〜、悔しい〜！なんのよ、あのバカ親！？」

祭と別れ冥琳と城の廊下を歩いていたときに、いきなり雪蓮が騒ぎ始めた。

「ねえ、冥琳もかう思ひでしょ？」

「・・・」

冥琳は何答えなかつた。

「冥琳？」

と言い、顔を覗き込んできた。

「つーあ、ああ。そうだな」と、とうとう答えてしまつた。

「嘘でしょそれ。冥琳？」

雪蓮が田を見て聞いてきた

「どうしてそう思つんだ？」

「冥琳のことだもん。わかるよ」ハズかしなくもなくそんなことを言つてきた。

「孫堅様が言つてこたことがな

「うそ。白夜のことでしょ？」

やはつわかるか

「白夜様には悪いこと思つてゐるが私も孫堅様の言ひつけたよつたと想つた。

私は、はつきり雪蓮の田をみて言つた。

それがあの方の『白夜様』のためになるなら

「雪蓮もわかつてこらのだらうへ。」

「・・・わかつてゐるわよ。そんなことわかつてゐるー。」

雪蓮は言葉を強めて言い放つた。

「・・・わかつてゐるわよ。あのナニカ・・・」

そこから先の言葉は出てこなつた。

ああ、そうだ。私も認めたくない

言葉に出したから認めてしまつてしまつから

「雪蓮、つひこと想ひが・・・

すのと回りかかる足音が聞こえた。

白夜 side

今日も、これから鍛錬だ。

つひこけど義母に恩返しするためには強くならなければ

「…………」

「うんー？」

なんだ？」の声つて姉さん？

行ってみよっ

「雪蓮、つらいと思うが」

あれ？冥琳もいたんだ。

あつ、冥琳と田があった

「白夜様」

「何大それ出すの？」

「ううん、なんでもないのよ」

姉さんがこれでもかといふぐらに手と首を振っていた。

「ふふ、変な姉さん」

「白夜様はこれからどうちらに？」

「ん？僕はこれから鍛錬なんだ。」

『鍛錬』と言葉を聞いた瞬間2人の眉間にわずかに動いた

「ねえ、白夜つらくないの？」

と姉さんが聞いてきた。

うーん。つらいかつらくないかで言つたらつらいけど

だけど・・・

「つらくないよ。だつて強くなつて義母や姉さんや冥琳を守りたい

んだ

「ナハ

「あつー・僕もう行かなきや。じゃあね、姉さん冥琳」

「ええ、行つてらつしゃこ」「行つてらつしゃこませ
姉さんと冥琳が笑顔で見送ってくれた。

よへし、今日も頑張るぞーーー！

雪蓮&冥琳 side

白夜は行つてしまつた。

「行つちぢゅたわね

「ああ、行つたな

「やつぱつ、まだ信じてみよう。白夜を

「ああ、ナハだな

神様、お願いします。

白夜（白夜様）の夢を叶えて挙げてください。

心から愛していいるあの子に

（白夜様に）

白夜 side

今日、もう一人の妹に会いました
名前は、姓 孫 名 権 字 仲謀
真名は『蓮華』歳は3歳で妹です

そして、今日は義母に呼ばれて本城に呼ばれたんです。
なんなんでしょう？

「白夜、お前は名を『策』といつ名を捨てなさい」

「え？」

数ヶ月ぶりに聞いた義母の言葉だった。

03天虎～名を無くす～（後書き）

疲れた。

頑張りました。

「世界のキャラ設定（漫畫）」

年齢です

Iの世界のキャラ設定

魏延	馬岱	鳳統	黃忠	馬超	諸葛亮	趙雲	張飛	關羽	劉備	名前	蜀	孫策	白蘭	白夜	黄巾の乱 開催時の年齢	
文長		士元	漢升	孟起	孔明	子龍	翼德	雲長	玄德							
焰耶	蒲公英	離里	紫苑	翠	朱里	星	鈴々	愛紗	桃香	真名						
16歳	15歳	12歳	23歳	17歳	12歳	17歳	10歳	17歳	17歳	年齢					19歳	

郭嘉	程?	于禁	李典	樂進	典韋	許褚	荀?	夏侯淵	夏侯惇	曹操	名前	魏	璃夕	嚴顏
奉孝	仲德	文則	曼成	文謙		仲康	文若	妙才	元讓	孟德				
稟	風	沙和	真櫻	凪	流琉	季衣	桂花	秋蘭	春蘭	華琳	真名			
16歳	14歳	17歳	17歳	17歳	12歳	12歳	14歳	17歳	17歳	14歳	年齡		5歳	24歳

呂布	賈駔	董卓	名前	其他	呂蒙	周泰	甘寧	陸遜	黃蓋	孫尚香	孫權	周瑜	孫策	名前	吳	張遼
奉先	文和	仲穎			子明	幼平	興霸	伯言	公覆		仲謀	公謹	伯符			文遠
恋	詠	月	真名		亞莎	明命	思春	穩	祭	小蓮	蓮華	冥琳	雪蓮	真名		霞
17歳	14歳	14歳	年齢		15歳	15歳	17歳	16歳	27歳	12歳	16歳	19歳	19歳	年齢		17歳

ミケ	トラ	シャム	孟獲	張梁	張寶	張角	張勲	袁術	陳宮	公孫贊	顏良	文醜	袁紹	華雄
			美以	人和	地和	天和	七乃	美羽	公台	伯珪			本初	
1 1 歲	1 1 歲	1 1 歲	1 1 歲	1 5 歲	1 6 歲	1 7 歲	1 6 歲	1 1 歲	音々音	白蓮	斗詩	猪々子	麗羽	1 7 歲

8
歲

Iの世界のキャラ設定（後書き）

どうだね？
こんな感じです。

04 天虎～孫家を追放される～（前書き）

これからどうしよう？

04 天虎～孫家を追放される～

『『策』といつ名を捨てる』

義母からそう言われた日から義母は僕と眼も合わさないようになっていた。

姉さんは、またギヤーギヤー言つていたが義母は聞く耳を持つていなかつた。

白夜 side

「ハツ、フツ、ハツ」

義母から『名を捨てろ』と言られてから

今まで以上に剣を振り続けた。

「（僕が弱いから）」

その回数が数十、数百を超えて腕が上がらなくなるまで振り掌（手のひら）から血が出るまで振り続けた。

「（こいつ～！またマメがつぶれちやつた）」

笑顔を見せた

だが、その顔を見せたのは一瞬で
すぐに何かを考え始めた

「あの言葉の意味って何だつたんだろ？」「
ぽつりと溢した言葉は周りに木霊した

あの言葉を、言われてから
なぜだか涙がこぼれてきた。

僕はまだ認めてもらつてないのか？

僕が弱いから？

僕の頭が悪いから？

考えれば考えるほど短所が思い浮かぶ

あの日から自分の部屋で涙を流した

1日泣いてなにかふつされた

「泣いてばかりじゃダメだ！？」

そうだ。泣いてばかりじゃダメだ！？

弱いなら鍛錬を今までの倍やればいい
頭が悪いなら勉強を今までの倍やればいい

絶対に認めさせてやる！？

雪蓮 side

なんだか最近白夜の様子がおかしい？
いつもよりなんだか鍛錬や勉学に励んでいる
まあ、このまま何かの才能が開花するかも知れないし
頑張つてね大好きよ白夜！？

冥琳 side

最近、白夜様の勉学の励み方が尋常だ
一度聞いてみた

「白夜様、最近勉強に対する姿勢が変わって来ていますね」

「えつ！まあ、うん」

あいまいな言葉を返してきた

「白夜様？」

私は知りたかつた

この方が悩んでいる」とを

あきらかに白夜様の様子が変わった。

いつからだ？

たしか、3日前・・・

「なんでもないよ。〔冥琳〕」

考え込んでいるときに白夜様がニッコリ笑いながら言い放つた

「・・・」

「冥琳？」

ああ、今の私を見ないでください

今の私は絶対に顔が赤いから

あなたは、ずるい私の心を震わせる

軍師として私情や同情をかけてはいけない

それは、幼いころから言われ続けてきた

だが、このお方は私の心を震わせる

「・・・りん！？〔冥琳！？〕」

気がつけば白夜様がに呼ばれていた

「はい！？なんでしょう？」

できるだけ冷静を装つて返答した

「いや、なんかいきなり静かになつたからで」

「申し訳ありません。ちょっと考え方を」「嘘はいつてない・・・はずだ

「とりあえず、僕はなにもないから

あつ、もう鍛錬の時間だ。また今度頼むね。冥琳」

と言い白夜様は部屋を出て行つてしまつた。

あつ、行つてしまわれた

白夜様私はあなた様を信じております

私はあなた様の味方ですよ

祭 side

ふーむ?

最近、策殿の様子がおかしい

しきりに「鍛錬しよう!?」と声をかけてくる

おかしいのう?この前までも真面目ちゃんだったんじやが

最近は異常じやのう

策殿は、初めてワシが受け持つた子じやつた。

だが、策殿には武の才能がなかつた

じゃが、なぜ田で追つているんじやろ?つ

努力する男は嫌いではない

ふーむ?

・・・・・まだ、ワシもいけるかのう？

白夜 side

今日、僕は8歳になつた。

数ヶ月ぶりに義母に呼び出された。

今、僕は本殿にいる

あつ、姉さんや冥琳、祭さんがいる

「義母上、あなたは何でしよう？」

何なんだうつ？

「白夜、あなたは今日で何歳になりましたか？」

「8歳でござります」

誕生日のことかな？

「そう」

とぽつりと言葉をこぼした

「あなたは、この国に孫家に必要ない人間です・・・・・あなたをこの国から追放します」

「え？」

その時、すべての音が止まつた

04 天虎～孫家を追放される～（後書き）

頭の中が混乱する

冥琳のキャラが崩壊してないか？

05 天虎～師匠ができる～（前書き）

ふ
む
サブ
い
で
す
な
～

05 天虎／師匠ができる

白夜は城門にいる

理由は、先ほど義母から言われた言葉で

姉さんがブチ切れたからだ

「ふざけるな――――――!?!?/??/??/??

姉さんは顔を真っ赤にしながら叫び散らした

「殺してやる！撤回しろーーー！」

「雪蓮ー落着けーーー？」

「雪蓮様ー落着いてくだされーーー？」

雪蓮が孫堅に掴みかかるうとしたところを

近くにいた冥琳、祭が止めに入った。

「離せ冥琳、祭！？あいつは白夜を、家族を捨てようとしているんだぞ！？」

パンッ

「なにをする？冥琳！」

冥琳が雪蓮の頬を叩いたのだ。

「お前の気持ちもよくわかる。

だがな、今だからこそ落ち着いて対処するべきだ」

冥琳は、手から血の気がなくなるまで握りしめた。雪蓮も冥琳の様子に気がついたのか唇を噛みしめ静かになった

冥琳は雪蓮の姿を確認し孫堅に言葉を放った

「孫堅様、理由を聞かせていただいでも？」

「理由は先ほどいっただろ？」「…」

「あんなのは理由になりなせん！？」

本殿にいる者たちはざわめいた
いつもは冷静で物静かな冥琳がそれも孫堅
に向かつて怒鳴つたからだ。

「堅殿、私も反対です」

「わたしもよ！？」

上から祭、雪蓮が冥琳に続いた

「孫堅様もう一度」判断を！」「

と言い冥琳は頭を下げた

それにつづき祭、雪蓮も頭を下げた

だが、

「だめだ。決定は変えられん」

帰つてきたのは冷たい一言だった

「白夜、城門に行きなさい。

そこでの、3人自室で頭を冷やせ」

言葉を発し本殿から出て行つてしまつた

「母さん！？」

「孫堅様！？」

「堅殿！？」

そして、3人は兵たちに連れて行かれてしまった。

そして、白夜は今城門にいる

「白蘭様」

すると侍女が近寄つてきた

「白蘭様、これを」

渡された物は、

数日分の路銀と

小さな小刀だつた

「では、白蘭様。おきおつけて」と侍女は帰つて行き、門がしまつた

そして、白夜は世界で一人になつた。

白夜 side

これからどうしよう？

白夜は、捨てられたというのに冷静だった
悲しいはずなのに泣けなかつた。涙が出なかつた

ここが、どこだかわからぬ

目は開いているが前は見えてはいなかつた

「ここ何処だ？」

気がつけば何処だかわからない場所にいた

「おい、そこの小僧」

声をかけられ振り返つてみると男の3人組がいた

賊 side

なんだこの餓鬼？

なんでこんなとこに1人でいるんだ？

まあいい、結構なもん持つてるようだし小遣い稼ぎしとくか

「おい、餓鬼いいもんもってんじゃねえか？」

「えつ？」

「金目の物置いてけや、だつたら命は助けてやるよ」

「あっ、はい！？」

やつぱり、金づるだつたか
ん？あの小刀なかなかだな

「おい、その小刀も置いてけや」

「えつ？」、「これだけは！？」

なんだ？そんなに大切なもんなんのか？
もつとほしくなつたな

「いいから、渡せ！！」

ドカッ

腹に蹴りを繰り出した

「グツ！」

白夜は数メートル先まで吹っ飛んだ

その際に、小刀を落とした

「へつ、最初から渡しとけばいいんだよ」
小刀を拾つたさいにチビが

「兄貴、もういつそ殺しちゃいまじょつや」

「そつそつなんだな」
デブまでもそつまつってきた

そうだな？殺しちまうか

「・・・えせ」「

小僧がフラフラになりながら立ちあがってきた

「あ?」「

「かえせ、返せよ屑虫が!-?」

ん、だとこの餓鬼が!-?

やっぱり、殺すか

「餓鬼、怨むんなら!-!」で俺たちに会つちまつた
運命を恨みな

と腰から剣を抜き振りおろしてきました

白夜 side

義母から貰つた。小刀が奪われた
これだけは、渡せない

「えつ?」、「これだけは!-?」

これは、義母に貰つた大切な物
絶対に渡せない

「いいから渡せ!-?」「

ドカッ

腹を蹴つてきた

「グツ!」

やばい、小刀を落とした

取り返したいのに体が動かない

「兄貴、もつこいつを殺しちゃこまじょひや
え？殺す？

僕を？

ふざけるな、何で死ななくちやいけない
僕が何したっていうんだ？

あ、もうこいいや

どうせ死ぬならおめーらも道連れだ

「かえせ、返せよ肩虫が！？」

死なんか怖くない

死ぬことなんぞ

「餓鬼、怨むなら」（）で俺たちに会つちまつた
運命を怨みな」

やつぱみつよ、母さん

今、剣が振りぬかれた

ガキン

「ここの子は、死なせないわよん」

そこには、パンツ一枚の変態（漢女）がいた

貂蟬 side

ふーん、ここが新しい外史ねん
この外史にはご主人様はいないようね

「誰がこの外史の主人公なのかしら？」

この世界は新しくできた外史

北郷一刀という存在がない外史

その外史を見に来たんだけど

まだ、黄巾の乱も終わってないのね

じゃあ、見る者も見たし帰りましょ「返せよ肩虫がー？」つ！
な、なにこの力は？

これは、氣？いや、違うわねん。

これは『霸氣』ね

どんな子のかしら？

ま、行つてみましょ！？

「こじへんのはずなんだけど？」

「餓鬼、怨むならこじで俺たちに会つちまつた
運命を怨みな」

やばい！？

気がついたら足が動いてこの子をかばつていた

あ～、そうなのねん
この子がこじの外史の・・・

「こじの子は、死なせないわよん」

守つてあげるわ。

だってこの子は、こじの世界にとつての大好きな人なのだから

白夜 side

なんだ？

空からなにか振つてきたぞ？

何者だ？

「よく頑張ったわねん。坊や」

坊や？

ということは味方か

よかつた。死ななくていいんだ
よか・・・・・つた

そこで、俺の意識はなくなった

貂蟬 side

あらん？ 寝むちゃったのね
私が来て安心したのかしらん？

「な、なんだこの化け物は！？」

「なんですって、誰が一度見たら一度と忘れない程の
化け物ですって～」

「そつそこまで言つてな

「問答無用！－ふんぬ～」

三馬鹿たち一人一人を殴り飛ばし屋にしたのであった

「んつもう失礼しちゃうわ

とプリプリ怒っていた

「それはそうとこの子どうしましょ？」
白夜を見ながら呟いた

「このままつていつのも可哀想だし、お持ちかゲフン、ゲフン
拾つていきましょ」

助かつたのか助かつてないのか?
わからない白夜なのであつた

白夜 side

ここはどこだ？

お花畠？なんで俺はここにいるんだ？

白夜はお花畠を歩いていた

あれ？ あそこにいる人って？

白夜は走り出した。

あの人気が誰だかもわからないのに
でも、確信したあの人は・・・

「母さん！？」

白夜が見たのは夢だつた
だけど、夢だと信じくなかった

「あらん、起きたのね？」

んっ？ な、なんだこのひと！？

何で裸？ 何でパンツ？ つていうか筋肉すげー？

白夜は軽く混乱していた

「びっくりしたわよ、歩いてたら賊にあなたが
襲われていたんだから」

えつ？ 賊？

あつ・・小刀！？

「あつあの賊は！？」

「ん~、私が追い払ったわよん」

そ、そんな

まだ、取り返してないのに

「あなた何を背負っているの？言ひて『らんなさい』と裸の人が聞いてきた

「・・・じつは」

話した。今までのことを
母が死に義母に引き取られたことを
国を追放されたこと
そして、あの小刀のことを

裸の人は真面目に話を聞いてくれた
しゃべり終えると裸の人は「つらい人生だったのね」といつてくれた。

その瞬間、涙が出た

「あつあれ？なんで涙が」

分からなかつた

辛いなんてぜんぜん思わなかつたのに

「いいのよ。泣いても。あなたは泣いていい資格を持っているわ
今だけ、今だけはおもいつきり泣きなさい」
その言葉を聞き自然と涙がこぼれた

うん。今だけは、今だけはおもいつきり泣こう

そして、一人の子供の泣き声が森に木靈した。

次の日、僕は裸の人の前に正座した

「お願いします」

と言つて、頭を下げいわゆる土下座になつた

「どうこうつもりかしら?」

「僕に、いや俺に武術を勉学を教えてください」

僕はこの人に教えてほしかつた

力とは何かを

正義とは何かを

「何故?」

何故だつて?

そんなの、決まつてゐる

「守りたいんです。俺の手の届く物全部を
守りたいんです!?」

そう、これが俺の本心だ

「だけど、俺は弱い。頭も悪い

だけど、今やんねえと自分が自分じゃなくなる

自分の想いをありつたけぶつけた

「わかつたわ、・・・だけど私は厳しいわよ?
修行中に死ぬかもしれないし?」

と脅してきた

「死ぬ覚悟なんざいつでも出来るてる

だがな・・・死のうと思つたことせ一度もねえ！？

「やつ。私の名前は貂蝉み 今日から師匠いになさー」

「はい！？俺の名前は、姓は孫 字は白蘭 真名は白夜です

「ん？白夜ちゃん『奴』は死んだの？」

えつ？そんなもの・・・・

「どうの世に捨てましたよ

そうだ。これからは孫策白蘭じやない

今日からただの『孫 白蘭』だ
ぜつてーに強くなつてやる！？

05 天虎～師匠ができる～（後書き）

貂蝉が師匠になりました。

無理やり過ぎたか？

下手だつたら「めんなさい」
長くてもすいません

天虎～番外編 豹蝉、卑弥呼に語る～（前書き）

あけましておめでとうございます

今年もよろしくお願いします

天虎／番外編 豹蝉、卑弥呼に語る～

あれから、俺たちは近くの村に行き
小さな小屋を借りた

白夜 side

「師匠？ 何でこんなとこに？」

修行なら山のほうがいいと思つが？

「最低、安心して眠れるところがあつたほうがいいでしょ？
うーん？ そんなものなのか

あつそれより修行！

「師匠、修行は！？」

師匠は、ため息をつきながらこう言った

「あのねん、この村に着くまで日が暮れるまで歩いたのよ？
私ならともかく白夜ちゃんはまだ基礎ができていな状況なの
しかも、白夜ちゃん。あなたは気づいてないようだけど
あなたは、とても疲れているは、休むのも修行よ」

と師匠は言った。

「うーん？ そんなものか

「わかりました。では、師匠お先に失礼します
ぺこりとお辞儀をし、寝台に入った

まあ、師匠がそう言つならそつなのか

それよりも明日から修行だ！

そのためには、早めに寝ないとな

その数分後、白夜は深い眠りについた
そして、夜は進んでいく

貂蟬 side

あらん？ 眠っちゃたようね？

背負つて走れば全然日が暮れないうちに来れたんだけど
でも、それは白夜ちゃんのためにならないし
グフフ 白夜ちゃん？ 明日からたつぷり可愛がつてあげるわ（性的
な意味ではなく）

ん？ あらん、あらん？

この気はまさか？

「ア」ここのんでしょう？ 卑弥呼

「ふむ、やはりばれてしまつたか」

「この人は、卑弥呼と言つて私と一緒に管理者
そして、私の師匠でもあるわ

「ん？ 貂蟬よ誰に喋りかけておる？」

「なんでもないわ卑弥呼、ただの読者サービスよ」

「まう、そうだったか」

なんでここに卑弥呼がいるのかしら?
まあ、大体は想像つくけど・・・

「我が弟子よ、お主何をやつたかわかっているのか?」
あ〜、やつぱりこの件ね

「何がかしら?」

私は、可愛く、と・て・も可愛らしく聞き返した。ここの重要な(貂蝉)

(談)

「その顔をやめんか、わかつてているだのだろう
我々のルールを」

そう、私は今、管理者というルールを破つている

管理者とは、新しくできた物語
つまり、『外史』を管理する者ということをいう
管理者のルールはいたって簡単

『外史を改ざんしてはいけない』こと
もつと簡単に言ってみれば死んだ人または
死ぬ定めの人を助けてはいけないことだ。

それを、貂蝉は、破つたのだ

「おぬしは、管理者のルールを破つてしているのだぞ?」
卑弥呼は少しどの聞いた声で言い放った

だが、貂蝉は

「ええ、それが何？」
と平然と言い放った

「おぬしな」

は〜、と卑弥呼はため息をいぼした

「じゃあ、聞くんだけど
私が救つた白夜ちゃん、孫白蘭を救つても
何故この外史は消えないの？」

「む？ それはだな」

さすがの卑弥呼でも言葉が詰まった
過去に、管理者が外史の住人を助けたといひ
その外史は消えてなくなつたからだ
だが、この外史はまだ続いている

などと考えてゐる内にぽつりと言葉を漏らした

「私は、いひ思つのよ」

「む？」

「私もこの外史の一部なんだつて、この外史に来て
白夜ちゃんを助けたとき感じたのよ。
ここが、この物語最初の、序章なんだつて」

卑弥呼は言葉を失つた

数百年いや数千年、外史の管理者をやつてゐるが
管理者までも外史の一部になることがなかつたからだ

いや、ありえないことだからだ

「つまりは、お主が助けることが決まっていた外史だと？」

「ええ、そう」「とね」

貂蝉は笑いながら言い放つた

「それに、初めて白夜ちゃんを見たとき
私は『恐怖』を感じたわ。この私がね」

卑弥呼はまたも驚いた

貂蝉の強さは卑弥呼も認める程の武の持ち主だからだ
そんなものが恐怖を感じるなど・・・

「では、その者は」

「ええ、あと数年私のもとで修行すれば
私、卑弥呼でさえも勝てないでしょ」「うね」

「何ー？ それほどまでか？」「

「まあ、白夜ちゃんは才能がないと思つて居るのでしそうけど?
白夜ちゃんは、才能がないんじゃなく開花していないだけなんだ

けど」

「それほどまでとは」

だが、新たな問題が発生した

「だが、もしもそ奴が闇に染まりでもしたら」
卑弥呼は今話を聞いていて少しばかり恐怖を感じた
その者がもし闇にでも染まつたらと思うと

「大丈夫よ、卑弥呼」

と貂蝉は何事にも動じずに言つた

「ふむ、その根拠は？」

「まず一つ曰は、白夜ちゃんの目を見てわかつたの
この子は悪人にはならないつて
つうん、なりきれないって」

「ふむ、ほかの根拠は？」

「最後の根拠は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・漢女おとめのカンよ」

ドーン

と言つ効果音がつきそうなぐらい自信をもつて言い放つた

最初は、ポカーンという顔をしていた卑弥呼だったが
しまいに、頬が緩んでいき

「ガハハハ、そうかそうか、それなら安心じゃ」

何故か通じ合つていた？

「では、お主はこれからその奴を」

「ええ、修行をせひいくつもりよ」

「そつか、ならワシも手を貸そつ

「ええ、せつしてくれるとありがたいわ
・・・・それから卑弥呼？」

「ん？ なんだ？」

「白夜ちゃんが背負つている過去は、想像以上よ
貂蝉はどこか悲しい顔をしていた

「・・・うむ、わかつた」

そつして、漢女おとめたちの夜は更けていった

貂蝉 side out

次の日の朝

「は～あ、おはようござこます。師匠」

眠りから覚めた白夜は居間にいる師匠にあいさつをした

「ええ、おはよう白夜ちゃん？」

「はい、おはようござこます」

「あ～、白夜ちゃんに紹介したい人がいるのよ
といい貂蝉は外へ出て行き誰かを呼びに行つた

「『』めんね、待たせて」

「いいえ、ぜんぜん
と白夜は手を横に振った

「紹介したいのは、私の師匠なよ
一緒に白夜ちゃんの修行を見てくれるそつよ

「えつ…本当ですか？」

そのことがとても嬉しかったのか満面の笑みを浮かべた

「卑弥呼入ってきなさいな」

「つむ」

と言い、入つて来たのはなぜか素肌に服を着ており
下半身には、フンドシ一枚の漢女おとめ入ってきた

「今、紹介された卑弥呼というものじゃ
今日から先生と呼ぶがいい」

「はい！先生

俺の名は、姓は孫字は白蘭
真名は白夜です」

2人とも自己紹介を終えた

「じゃあ、今日から修行ね

「うむ、そうじやの！」

「はい！」

上から貂蝉、卑弥呼、白夜の順で言葉を発した

「じゃあ、行くわよ

「むす」

そして、白夜は

「うじー」

と頬を叩いて師匠たちを追つた

そして、師匠、先生による
修行が始まった

天虎～番外編 豹蟬、卑弥呼に語る～（後書き）

眠い

頑張りました

よいお年御

06 天虎～未来の霸王と猪その妹に会ひ～（前書き）

ドンと時間が進みます

06 天虎／未来の霸王と猪その妹に会う

白夜 side

あれから、4年たつた
俺は今12歳になった。

この4年に起きたことといえば
『孫堅の死』だ。

師匠がそのことを教えてくれた時は時が止まつたよつに感じた
あの、義母が死んだ？

だが、

今さら止まるわけにはいかなかつたからな
俺は修行を続けた

一度師匠に「つらくなない？」と聞かれたことがあつた

そりや、悲しいに決まつてゐる

あんな扱いを受けた俺だけど俺にとつては
大事な母だつた

そりや、何で俺を捨てたんだ?
何で捨てられなきやいけないんだ?

と義母を怨んだことだつてある

だけど、今は怨んでねえ・・・・かな?

いや、かな?つておかしいかも知れねえけど俺自身も
わからんねえんだよな、國から追放されて世の中を見ることもできた
それに、師匠や先生にも会えて力を知てくれた
たぶん、そのまま國に居続けたら師匠や先生にも世の中が

どうなつていいのかもわからなかつただのう
だから、怨んでねえつと言つちまつてるけど
たぶんだけどまだ心の片隅に怨みつてのが残つてゐる
これは、一生、心に残ると思う

だけど、俺はもう前に進むつて決めたんだ
この背中の『傷』にかけてな・・・

おつと、話を戻すと

この4年俺と師匠、先生と地獄のような修行をした
何回死のうと思つたか・・・
そんな時師匠は俺に

「白夜ちゃんは、武と知の才能がないわけではないのよ
たとえば、私たち人の中には才能と言う物があるの
それは、生まれてすぐ開花するか、それとも歳を
重ねてじつくり開花させるかよ」

すると、師匠は近くの石をとり
「これを私の才能の塊だとすると
白夜ちゃんの才能はそこにある
小石。いえ、砂の一粒ぐらいなのよ
だから、私たちは その一粒を開花させるのよん
」

何度も死にかけた

今まで呪でやつてきた鍛錬なんて
ただのお遊びだつたんだと思うまで

辛かつた、苦しかつた

でも、自分でもわかるくらいドンドン
強くなつていてるのがわかつた

嬉しかつた、これで自分の周りの人を守れると思つた

そんな、ことを思いながら修行4年の俺の誕生日に
「免許皆伝よん」「うむ！そつじやな」
唐突に師匠と先生から言われた。

まあ、嬉しかつたけどそれ以上に嬉しかつたことは
「これは、そのお祝いよ」

と師匠が差し出してくれたのは、見たこともない刀2本だった
「この刀は日本刀と言つてね、扱いは難しいでしょうけど

今のおあなたなら扱えるわ」

と師匠に日本刀という刀一本を貰つた。

刀を貰つた俺は上半身の服を脱ぎ捨て
貰つた刀を一本とも鞘から抜き両手で刀を
背中につけ刀を引っ張りあげた

プシュー

背中から血が拭きでる

「ちょっとー？白夜ちゃん！」

「白坊！？何を？」

師匠と先生はその姿を見て動搖した

「俺は、国を追放されましたけど俺は守ると決めたもんを
守れなかつた。だから、俺はこの『恥』を一生背負つていいく
師匠言いましたよね？武人の背中にある傷のこと」

白夜は痛みを噛みしめながら貂蝉に言つた

するとい、貂蟬と卑弥呼は、そういうことかとわかつたらしく

「ええ、言つたは『背中の傷は武人の恥』だつてね」

「しかしなんと無茶なことを」

白夜はその答えに満足いったのか

静かに氣を失つた

そして、日が覚めると師匠と先生に「『無茶します』」
と怒られてしまった

ですよね～俺自身もそう思つ

傷が治り俺は旅に出ることを決めた

「師匠、先生、旅に行つてきます」

師匠と先生はその言葉を待つていたと言わんばかりに
賛成してくれた

「ええ、今のあなたなら」

「つむ、寂しくなるが自分考える信念を貫けーー！」

「はいー！」

そして俺は旅の準備をしていくときに後ひで気配を感じ振り返つてみると師匠がいた

「白夜ちゃん、けして自分の誇り『魂』だけはおつちやダメよ」

「わかつています」

数日後、師匠と先生から貰つた刀を両腰に一本ずつ付け
数日分の路銀を貰い、師匠達を背に果てなき荒野へと歩いて行つた

「寂しくなるわね」

「うむ、寂しいぞ」

「あの子は、本当に私たちの想像を遥かに超えていくわね」

「そついいえば、先ほど何を聞いていたのだ？」

「白夜ちゃんに聞いたことなんだけど白夜ちゃんのお父様は
戦場で『白虎』ついていわれていてね
白夜ちゃんに聞いたら自分が名乗りたいのは『天虎』だつて
言つていたの」

「天虎とはなんだ？」

「白夜ちゃんはこう言つてたわ

天を駆け抜け大地を焦がすつてね

「ふーむ？ 天を駆ける虎か」

「ええ、略して天虎」

「ふむー白坊らじー、これからが楽しみだ」

「ええ。

白夜ちゃん、あなたの物語はここから始めるよ」

そして、物語は始まる

白夜 side out

それから数日後
現在白夜は？

とある地の川で釣りをしていた

「いや～まいつた。路銀がなくなりじどうじよつと思つていたら川があるとはな」

そう白夜は師匠達から貰つた路銀をすべて使い無一文だったからだ
白夜の数日を振り返つて観ると

四日前、荒野を歩いていると村らしきところがだがここで
山賊登場・・・数分後山賊たちは天国へ召された

一昨日、村で一休み、路銀を使う

昨日、餓死寸前の子供を発見食べ物を惠んでやると
どこからか子供大量発生・・・数分後、路銀空っぽ

人が優しすぎる白夜であった

「あー、腹減つた。早く釣れねえかな～」

今は、昼過ぎ、路銀がなくなり朝飯も食べれなかつたのだ

「おひ、きたきた大きいな」

白夜の竿に当たりが来たようだ

「なかなか重いな、だがぜつて、逃がさん俺の昼飯」

ヒュン

ブチシ

一
あ

釣り糸を切つてしまつた

フッキン

次に切れたのは白夜の怒りだつた

だれじせ

と声を放ち鬼の形相で剣の飛んできたほうへ走って行つた

? ? ? side

「……こら最近にこのあたりには賊が出ないといつ情報をもとに
お供の春蘭と秋蘭をつれて散歩していたのに
まさか、今日に限つて現れるなんて

「嬢ちやんり、金田のもん置いてけや」

「置つてたゞ懸こゆつてせしむニギヤ」

絶対に嘘だつてことがわかる

私は小さなころから勉学や人の見分け方を学んだ
大抵なことは目を見ればわかる

この賊たちは明らかに盗むものを盗んだら私たちを殺す気だつて

すると、賊の一人がわたしに手を伸ばし

「なあ、嬢ちゃんら聞いてる?」

賊の手が私に触れるその前に

ヒュ

私の目の前を剣が通過した

「貴様――華琳様に触れるな!――」

春蘭が賊相手に剣を振るつた

「あぶねえな!おい!」

「へい

賊は春蘭の後ろに回り込み剣を掴み向こうへ放り投げ春蘭を抑えつけた

「なつ!何をする!?」

「へへ、お返しだつ」

賊の一人が私たちの前へ現れ春蘭を殴り飛ばした

「ぐつー！」

「姉者！？」

妹の秋蘭も姉を助けようと向かおうした時

「おつと、いかせねえぞ」「
すぐに賊が秋蘭を抑えつけた

すると、賊の一人が

「頭、もう殺したほうが早いんじや？」

「そうだな、もうやつちまうか
賊の頭らしき奴が剣を抜き近寄つてくる

「小娘、死んでもうづぜ」
と剣を振り落とした

「「華琳様——」」

春蘭も秋蘭も叫んでいる

死んだらそこで天命に見放されたこと
でも、
でも、

死にたくないな

爺様、父様、母様、春蘭、秋蘭

先に行くわ

先に行く私を許してね

それから・・・

頬を涙が流れる

「みんな、ごめんね」

ガキン

金属と金属がぶつかり合つ音がした

目を開けてみると

そこには・・・

「おいおい、まだ諦めるには早過ぎるだ

銀色の髪をした男が立っていた

「！？」

白夜 side
ぜつて／殺す
飯の怨みは怖いぞ～

なんだか向こうのほうがうるさい

「つたぐ、うるせえな。何やつてんだよ」
と思い近くまで行つて覗いて見ると金髪の女の子に
賊らしき男が剣を振り落とした

やばいっ！？

本能で少女の前に飛び出してしまった

「みんな、ごめんね」「
ん？誰に謝つてんだこいつ

ガキン

刀で振り落とした剣を止める

「おいおい、まだ諦めるには早過ぎるだ

「なつなんだテメー！？」

あーうるせえ。はい、お前死罪
あいにく今、俺はものすごく怒っています
えーと、賊らしき人らは全員で7人が
楽だな今回は

「なうに、ただの旅人ですよ
ただし・・・」

俺はもう片方の刀を抜き相手に向ける

「人には天虎って言われてるがな！？」

そして、俺は賊相手に向かっていった

06 天虎～未来の霸王と猪その妹に会う～（後書き）

頑張ったような気がする

感想待つてます

IJの世界の設定2（前書き）

強烈な頭のよれです

では、どうや

IJの世界の設定2

真名で紹介します

武官編
武の強さ

白夜 > > > (人として超えてはいけない壁) > > 恋 > > > 愛紗・春
蘭・雪蓮 > > >
鈴々・祭・星・霞 > > 翠・秋蘭・思春・華琳 > > > 紫苑・桔梗 > >
亞莎・明命・凪・焰耶
> 華雄・蒲公英 > > 流流・季衣 > > 真桜・沙和・蓮華・白蓮・猪々
子・斗詩 > > >
> > > 小蓮・美以 > > > > > > > > > > > > > > 桃香 > > 麗羽

軍師編
頭の良さ

朱里 > > 冥琳 > 雛里・華琳 > > 白夜・風・凜・桂花・穏・七乃(袁

IJの世界の設定2（後書き）

どうでしょ？

つていうか、華琳軍師いらんだろ

編集しました

07 天虎～未来の霸王を救う～（前書き）

頑張りまっしょい

07 天虎～未来の霸王を救う～

「人には天虎って言われてるがな！！」

という言葉を放ち一番近くにいた賊の首を飛ばす

「まず、一人」

この一言が賊たちを恐怖させた

「や、奴は餓鬼一人だ、囮んで殺れ」

賊の頭が部下たちに指令を出す

「死ねや餓鬼――――」

今度は3人白夜に突っ込んできた

「三下が」

突っ込んできた賊たちが剣を振り降ろしたところを

白夜は刀一本で簡単に止め

もう片方の刀を手の中で逆手に持ち直し

賊たちの腰から切り込み3人を真っ二つにした

「あと、3人」

「な、なんなんだよ。お前は」

賊は恐怖ではない何かを感じていた

それはまぎれもない『死』を感じていた

まぎれもない今、目の前にいる子供に部下を殺し返り血を浴びている子供に

「あ、アニキ。こ、こいつ天虎つて」
先ほどの台詞を思い出したのか賊の部下が騒ぎ出した

頭（賊） side

何なんだよこいつは

最初はただの餓鬼だと思っていたが
あつという間に一人、また一人と部下が死んでいった
ほんとに何なんだよこの餓鬼は

「あ、アニキ。こ、こいつ天虎つて」

すると部下の一人が顔を真っ青になりながら言つてきた

天虎？ どつかで聞いたことが？

「何だ？ その天虎つてのは？」

「アニキ知らないんすか！？」

天虎つてのはですね・・・戦場を駆け白銀の髪に血を浴び敵を狩
る姿はまさに虎

天を駆け抜け大地を焦がす・・・それを全部略して『天虎』

思いだしたぜ！

そういうや、この前向こうの山の山賊たち300人が壊滅したつい
う噂を聞いた

それを見た奴はこう言う・・・「天虎」と

最近だが賊たちがもつぱら噂していることがある
『天虎には近づくな』

「こいつが天虎だつていうのかよ
こんな餓鬼が

「おい、何時まで喋つてるんだ?」
その言葉で冷や汗が止まらなかつた

頭（賊） side out

白夜 side

「へー、俺つてそう言われてんだ
まあ、俺も言ってたところもあつたんだが
まさか、こじまで名が広がつていいなんてな

・・・・いや／＼人気者だな俺

ゴホン、まあそのことは置いといて

「おい、何時まで喋つてるんだ?」

まづは、こじらを・・・・殺すか

白夜 side out

白夜は標的をあとの人3人に決めた

「ほら、こいよ。肩ども相手してやる」

白夜は賊たちを挑発し始めた

普通の人はこんな挑発には乗らないのだが
奴らは・・・

「この、餓鬼が！」

「調子に乗りやがつて！」

賊の2人は簡単に挑発に乗り
剣を抜き白夜に突っ込んできた

「馬鹿が」

ぽつりと言葉を漏らし

2人の剣を刀をクロスにして受けとめ
そのまま、刀を剣の刃の上を滑らせ2人を真横に真つ一つにした

「あと、1人だ」

あと一人の賊を見てみると

「動くんじゃねえ、こいつを殺すぞ！」

近くにいた黒髪の子供の首に小刀を向けた

「春蘭！？」

「姉者！？」

二人の女の子が叫ぶ

それを見て白夜は

「…………で？」

逆に聞き返してした

「は？」

「いや、殺すなら殺してみるよ

…………できるならな」

「え？」

白夜は一瞬で賊の後ろに回り込み首を飛ばした

そのとき、賊が最後に見たものは、白銀の髪を血で染めていた天虎の姿だった

華琳 side

最初は本当に助からないと思っていた

こんな、男に何ができると

だが、今、目の前にいる男は一瞬にして賊7人を殺した

その姿に私は恐怖した

だが、ほかの感情に私は美しいと思つた

この私が男に見惚れるなんてね

それに、この男が最近噂になっている天虎なのね

ふふ、ほしいわね

華琳 side out

白夜 side

あ〜疲れた

無駄な労力使つちまつたな

・・・・血だらけだな俺

さつきの川に行くか

つと、その前に

「お前ら大丈夫か?」

「ええ

「う、うむ」

「ああ、助かつたぞ

上から、金髪、黒髪、青髪が言つてきた

「そつか、じゃあな。

これからは気を付けるよ」

と手を振りその場から立ち去り、としたとき

「ちょっと待ちなさい」

金髪が服を引っ張り、声をかけてきた

「あなた、名前は?」

「人の名前を聞くときは自分から名乗れって言わなかつたか？」

「貴様——華琳様に向かつて！！」

黒髪は俺に向かつて怒鳴りつける

それを、

「姉者！やめろ！」

青髪が後ろから黒髪を止めていた

「やめなさい！春蘭」

「むう、申し訳ありません」

金髪の一聲で黒髪が静かになつた

「『めんなさい。家のものが

それより私の名前は、姓は曹、名は操、字は孟徳
真名は華琳よ』

「華琳様！？こんな奴に大切な真名を」

「『Jの人は、私たちの命の恩人
真名を預けるのはあたりまえよ。あなたたちも名と真名を言いな
さい』

「はあ、華琳様がおっしゃるなら」

「はつー！」

なんかドンドン話が続いてくんんだが

「あ、あの？話聞い「我が姓は夏侯、名は淳、字は元讓、真名は春蘭だ」てないよね？」

「私の姓は夏侯、名は淵、字は妙才
真名は秋蘭です。助けていただきありがとうございます」

「いや、気にすんな」

「こいつは、いい奴だ

うん。いい奴だな

「じゃあ、あなたの名は？」

金髪、いや華琳が俺に聞いてきた

「俺の名は、姓は孫、字は白蘭
真名は白夜だ」

「真名まで？」

華琳が俺に問う

「ああ、お返しだ

それに、女の子には優しくしろつて師匠や先生が言っていたしな

俺は華琳、春蘭、秋蘭にそう言いながら笑顔を見せた

「／＼／＼／＼／＼」

ん？なんでこいつら顔が赤いんだ？

風邪か？（白夜は自分の顔の良さをわかつていなかつた）

「大丈夫か？」

俺は華琳に手を伸ばす

「え、ええ大丈夫よ」

華琳はその手を掴んだ

それが、霸王と天虎の初めての出会いだった

07 天虎～未来の霸王を救う～（後書き）

戦闘シーンかけてるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8829z/>

もう一人の孫策～天虎の生き様～

2012年1月8日19時52分発行